

2024年4月29日

馬籠・妻籠ブラ歩き（2024年4月26日～28日）

山口光恒

Day 1 4月26日(金) 東京一馬籠宿 曇り 最高気温 24℃

8時17分品川発の「のぞみ」に家内（幸子）と長女（園子）と共に乗車、名古屋經由中津川に10時48分着、市内の「わくり」という蕎麦屋で腹ごしらえをしたが、大変美味しく、満足できる味で、幸先が良かった。

12時15分中津川発馬籠行きのバスに乗ったがまさに超満員、我々はかろうじて座れ、馬籠の少し手前の「新茶屋」で下車後、ひと休みして歩行開始。馬籠宿まで1.9km、30分の登りの道だが、幸子が膝を痛めているためゆっくり歩いて約1時間を費やした。途中山並みが見える雄大な景色だ(写真1)。12時54分正岡子規の句碑を通過、岩に彫ってあり不正確かも知れないが、

桑の実の木曾路出づれば穂麦かな

とよめる。なお、バス停の少し前に芭蕉の碑があったようである。ここにはどのような句が刻まれていたのであろうか¹。

13時18分には島崎藤村の父の島崎正樹(夜明け前の青山半蔵)の記念碑、次いで馬籠宿まで600mの地点で諏訪神社を通過。遠くの急坂に人家が連なる馬籠宿が見えてきた。13時43分に馬籠宿着。この少し前からはかなりの急坂ではあったが、道は美しい石畳で歩きやすい。馬籠宿に入るとそれまでのまばらな歩行者が嘘のように狭い道は観光客で溢れている。その半数以上は外国人で、次いで団体の中高生だ。

宿に入って300mほど登ったところで14時15分にこの日の宿の民宿「馬籠茶屋」到着。場所は馬籠宿の丁度真ん中だ。予想していたとはいえ10畳の畳敷きでベッドがなく、何とか折りたたみ椅子を一つ借りることができたが、園子は別として我々老夫婦は一旦畳に座ると立つのが大変だった。布団から起き上がるにもかなり時間がかかる有様だ。旧東海道を江戸から京都まで歩いたときにはベッドがない旅籠は由比と鈴鹿峠の坂下宿だけだったが、やはりこれには参る。しかし馬籠宿にはベッドがある宿は皆無と言うことでやむ無しである。

荷物を置いてすぐに馬籠宿の残り半分の散策を始める。まずは地元の文豪島崎

¹ この点に関し、畏友吉田清直さんから「送られつ送りつ果ては木曾の秋」という句であるとの教示を受けた。

藤村記念館を訪れる。藤村生誕の地だけに資料も充実している。特に蔵書が多数あり、中でも洋書の数は多い。日本語では漱石全集の他、福沢諭吉全集もあったことが興味を引いた。しかし街の賑わいとは別にここの人影はまばらだったのが気になった。元々外国人には期待できないことに加えて、日本の若い人にも藤村は遠い存在になってしまったのだろうか。果たしてここを旅する何人が「夜明け前」を読んだのだろうかとの感慨に浸る。ここで小一時間ほど楽しい時を過ごし、夕方になって観光客が激減する中を馬籠宿の外れの見晴らし台までの急坂を登る。途中、水車小屋もあり街は美しい(写真 2)。幸子は膝を悪くしているので見晴台手前のベンチで休憩。園子と二人で登った見晴台では残念ながら曇天の為、期待していた恵那山は見る事ができなかった。宿への下りの途中で数多くの店を冷やかしつつ中山道の手拭いなどを購入。コーヒー屋でひと休みして宿に帰る。

夕食前に一風呂浴びた。浴室は男女別だが、男湯にはシャワーと浴槽はあるが洗面器がないので顔を洗うことができない。二人位しか入れない湯船に体を沈めても、いつ何時外国人が入ってくるかも知れないので緊張しながら風呂に入るという有様である。

夕食は道の向かいにある宿の大食堂で部屋ごとに決められた席でとるのだが、驚いたことに総勢 40 人ほどの宿泊客のうち日本人は我々だけ。外国人は白人の方が多いが、国籍や言語は様々で、我々にとっては外国で食事をしているに等しい感じであった。従業員は女性 3 人男性 1 人で、これも全員アジア系(フィリピン人?)で、滞在中は旅館側に一切日本人を見かけなかった。ただし従業員のアジア系女性は英語と日本語はかなりうまく、しかも親切だった。食後、部屋に帰り、外国人はふとんでどうやって寝ているのだろうと思いながら。8 時半頃寝た。本日の歩数は 15490 歩

Day 2 4月27日(土) 馬籠一妻籠宿 小雨のち曇り 最低気温 12℃、最高気温 25℃

朝 5 時半頃から周りの部屋がうるさく目が覚め眠れなかった。あまりにうるさいのでトイレに立った序でに Be Careful! と言ったら一瞬静かになったが、暫くするとまたワイワイガヤガヤで、睡眠の妨げになること甚だしい。経営者に注意をしようにも経営者は全く顔を出さないのどうしようもない。この辺り大いに改善して貰いたいところだ。

既述の通り畳の部屋なので光恒と幸子は起き上がるのがひと騒動で、2 人とも足

がつって薬を飲む有様だ。やはりベッドでないとダメだとの思いを強くした。

7時半から昨晚と同じ食堂で大人数で朝食後 9 時前にチェックアウトし、馬籠宿を 300m ほど下った先にあるバス停から 9 時 25 分発妻籠行きバスで馬籠峠で下車。ここから歩き始める。馬籠茶屋宿泊客のうち日本人は我々だけだったことから分かる通り、兎に角ここは外国人ばかりだ。バス停には我々と外国人カップル二組のみだったが、一組はベルリンから来たドイツ人夫婦で、これから高山へ向かう人達。もう一組はメルボルンから来た夫婦で妻籠へバスで行き、馬籠まで歩いて帰るという人達だった。

我々は馬籠から妻籠まで歩くことも考えたが、雨模様だったことと、幸子の膝のことを考え、全工程約 8 キロのうち、特に急坂の登り 2.2 キロをバスに切り替えたものである。

馬籠峠下車 9 時 36 分、雨が降って来たので雨支度をして歩き出した。最初はかなりの急坂だった。10 時 15 分に一石栃立場に到着、桜が満開で綺麗だった(写真 3)。この小屋の主人が囲炉裏に火をおこし、温かいお茶でもてなしてくれ、多くの人が立ち寄っていた。

11 時、県道と交わる中山道一石入り口を通過、川を渡り県道添いを少し歩き山道に入る。馬籠—妻籠間の旧中山道は山道を歩くと車が走る県道を横切り、再び山の中を歩くという感じが続いている。暫く歩くと男滝、女滝左方向との標識があるが、幸子の膝が悲鳴を上げ始めたので、滝は端折り、旧道工事のため民家の裏を回って庚申塚の手前の景色の良いベンチでお昼休憩。フランス南部から来た若夫婦と 20~30 分話をした(写真 4)。彼らは東京へきて、京都、姫路、広島、宮島経由で妻籠に来て再び東京に戻って帰国する、3 週間のバカンスの途中だった。東京の江戸博物館が 2 年位先まで休館中でガッカリしたとのこと。歩行を再開し、急坂を下って庚申塚バス停を 12 時 36 分に通過。ここから妻籠宿までは 2.2km との表示がある。おかしかったのは、休憩中に日本人の 7~8 人連れが通りかかり、やっと日本人に会えて日本語が通じると冗談を言っていたことだ。この区間はそれほど外国人が多い。

大妻籠宿を経て、午後 1 時 22 分に木曾川沿いの妻籠宿入り口に到着。この付近で朝、バスで一緒になったメルボルンからのカップルに再会。一緒に写真を撮る。妻籠宿のコーヒー屋でひと休みの後、14 時 47 分この日の宿の「藤乙」に到着。馬籠峠から妻籠まで通常のハイカーが 1 時間 50 分で着くところを我々は昼食休

憩を入れて 5 時間と約 3 倍近くかかった訳で、高齢と幸子の膝の不具合の結果思わぬ長時間歩行となったわけだ。幸子は本当によく我慢をして歩いてくれたと思う。一休みの後直ちに隣の脇本陣林家を訪れる。妻籠宿には本陣と脇本陣の建屋が残っているが、脇本陣の入場料が 700 円、本陣のそれは 300 円と脇本陣の方が建物や展示が充実している。

脇本陣でのお年寄りのガイドの説明はそれなりにおもしろかった。そもそもこの建物は総檜造りだそうで、暖炉への着席順も当主と長男が中心で、次男以下と当主の嫁は一段下がった場所と決まっているとか、明治天皇の全国行脚の一環として妻籠訪問の際、財力が衰えた本陣に代わって脇本陣の林家で天皇が休憩されたが、その準備がいかにも大変だったかと言った話である。

しかし本当に興味を惹かれたのはその裏に併設された歴史館で、ここでは江戸時代末期から明治維新にかけて当時の馬籠本陣当主である島崎春樹(藤村の実父)が木曾谷の木材利用と伐採による農地拡大に向けて住民を代表して何度も根拠書類を添えて幕府及び新政府に請願したにも関わらず、都度却下された文書が公開されており、正に長編「夜明け前」で藤村が書いた通りであることが示されている。なお、「夜明け前」では藤村の実父(小説では青山半蔵)が発狂して座敷牢で狂死することになっているが、展示されていた藤村実父の書いたものを見る限り、この人は平田派の国学者で相当の教養がある知識人であることが窺えた。まさに馬籠・妻籠一帯の中心には常に島崎家があったようである。

この他にも例えば満州読書分村(よみかきぶんそんと読む)事件がある。これは昭和 7 年の満洲国建国の後、政府により満州への移民が推奨され、木曾の読書分村からは昭和 13 年から 18 年にかけて 220 戸、850 名余りが移住したが、日本の敗戦による虐殺その他で女子供を中心に開拓団員の 6 割近くの未帰還者を出した事件である。この詳細についてもここの展示で新たに知った次第である。この他木曾谷の電源開発を巡る福沢桃介(諭吉の女婿)の活躍(大同電力、現在の中部電力社長)の展示も興味深かった。

次にすぐ斜め前にある本陣を訪れ、展示を見る。ここでは藤村の兄(次兄)の広助関連の展示が多数ある(藤村、本名春樹は末っ子)。まず藤村の家系図を示す(写真 5)。島崎家は代々馬籠及び妻籠の本陣を務めていたが、馬籠宿の本陣は藤村の父正樹から長兄の秀雄が継ぎ、次兄の広助は幼少にして母の実家である妻籠の本陣島崎家の養子となり妻籠のリーダーであった。この広助は木曾の住民のために社会の表に立って多大な働きをし、本陣の展示にはこのことを語る資料が多

数あり、広助の幅広い活躍の例として大鳥圭介から広助宛の書状もあった。

本陣での展示のもう一つの柱は広助の次女「こま子」に関するものである。ここには本人の写真や手紙も展示されている。藤村の最初の妻冬子の死後すぐに広助の指示でこま子(藤村の姪)は藤村の世話をするため信州から上京し、藤村の家に住み込んだが、数年を経ずして藤村とこま子は男女の関係となりこま子は懐妊、生まれた子供はすぐに他家に出し、広助も藤村もこれをひた隠しにしたが、その後藤村が朝日新聞にこれを材料として「新生」という小説を発表したため大きな騒ぎとなったものである。これを機に藤村は足かけ 3 年に及ぶパリ生活を送ることとなった。このこま子の写真や手紙が展示されており、一種の感慨を持ってこうした資料に目を通した。彼女に限らず、島崎家の人々は当時としては相当に高い教養を持っていたことが窺えた。

妻籠の街並みを散策で楽しんだ後(写真 6)、夕刻宿舎の「藤乙(ふじおと)」に帰って一風呂浴びる。宿のご主人藤原洋平氏及びそのお嬢さんの挨拶を受ける。ここは畏友吉田清直さん絶賛の宿で、我々も予約の際ご主人が 10 年に亘ってイタリアのアドリア海に面した Bali に YKK のイタリアの代表として駐在されていたこと、お嬢さんもイタリア語と英語が堪能なことを聞いていると伝えてあったので、この二人から歓迎されたものと思う。ここはコロナによる従業員の減少で宿泊客を制限しており、我々が宿泊した当日は客は 4 組、このうち日本人は我々のみであった。我々夫婦及び長女で 2 部屋を与えられたが、座敷ではあっても部屋の奥にはテーブルと椅子が 2 脚用意され、安心して部屋でゆっくりと過ごせた。

藤乙のサービスは前日の馬籠の宿とは天と地ほどの差があった。夕食前にゆっくりと入浴、和食での夕食は全ての料理がおいしく、しかも絶妙のタイミングで一品ずつ供される。テーブルにははじめから全ての料理が並べられていた前日は全く違った心のこもったサービスだ。各テーブルの間も十分の間隔で、イタリアからの客にはご主人がイタリア語でサービスし、フランス(スイス?)からの客にはお嬢さんが英語でサービスをするという具合で、これでは外国人の居心地が良いに違いない。

食後はご主人から色々な話をお聞きしたが、その中の一つとしてご主人の祖母が「夜明け前」のほぼ全編を記憶しており、ある人が小説中の一節を口にしたところ、それは同書の何章の何節だと指摘して相手が驚いたとの話もあった。また、吉田さんにメールを打つことを勧めた所実際にそうされ、これを機に吉田さん

とのメール交換のルートが開通したことは嬉しいことだ。ご主人の話ではお嬢さんはアメリカの高校・大学を卒業とのことで英語が堪能なわけだ。親子 3 人宿のサービスに大満足の日であった。

妻籠宿は街の景観を守るために「売らない、貸さない、壊さない」の 3 原則を真直に守っているそうである。ご主人が YKK を引退後祖父の代からのこの宿を継ごうと決心されたのはこのことが背景にあるのだそうだ。過疎化が進む中でこの原則を遵守しつつ町の発展を図るのは今後の大きな課題ではないかと感じた。

夕食の後妻籠宿の各家にぼんぼりの照明があって美しいとのことだったので 3 人で外出した。幻想的な夜景だった(写真 7)。宿のサービスと脇本陣・本陣の展示に満足して眠りについた。この日の歩数は 19000 歩

Day 3 4月28日(日) 妻籠一東京 晴 最低気温 13℃ 最高気温 27℃

朝 6 時半の起床の鐘で目覚めるまで熟睡した。これも前日との大きな差で、お陰ですっきりした目覚めができた。夜静かであることが宿の重要要件であることを改めて実感した。ゆったりした気分で朝食を済ます。大変おいしい。この日は 16 時 6 分名古屋発の新幹線の切符を買ってあるので、逆算すると南木曾駅発 13 時 26 分の電車に乗る必要がある。妻籠一南木曾は約 4km、元気な人なら徒歩 40 分だそうだが、前日の状況からこれ以上歩くのは今後悪影響を及ぼす可能性があるのをこれを諦めた。他方バスの時間を調べると南木曾駅で無駄な待ち時間を過ごすことになるので、午後 1 時にタクシーを呼んで貰うこととして、再度妻籠の町を散策した。この日のハイライトは紙すき体験で、光恒・幸子両名が挑戦したが、幸子の方がうまいとの評価だった (写真 8)。

とは言っても狭い町なので、幸子と園子に少し付き合った後光恒だけは再びお気に入りの脇本陣・本陣に戻り、再度ゆっくり展示を見る。11 時半に藤乙に戻り、とろろ蕎麦を注文。我々は早めだったので何とか待たずに座れたが、それ以降はランチの客が長蛇の列をなしている。皆ここがおいしいことを知っているらしい。藤乙が宿は休業してもランチ営業だけは続けるとのことだったが、その理由はこれで十分わかる。できることなら宿泊の方も早く再開してほしいものだ。聞くところによるとコロナで客が激減した際、従業員の多くが中津川周辺にあるトヨタの関連工場に転職して定着してしまっているとのことだった。

ランチの後預けた荷物を受け取り、再度町に出て前日の珈琲屋で小休憩の後タクシーで南木曾駅に向かい、そこから中津川、名古屋経由で新幹線で帰京。今回

は疲労を防ぐためグリーン車を使ったが、驚いたことには結構な数の中年女性が単身で乗って、車内でパソコンを叩いていたことである。女性の社会での活躍を実感した次第だ。6時過ぎに帰宅。大いに満足した木曾の中山道の旅は無事終了した。同行してくれた娘の助けによるところが大きい。また、友人でこの道の達人の吉田清直さんには資料提供の他全般に亘って大変お世話になったことを、感謝を込めて付記する。この日の歩数は 12000 歩弱。

以上

(写真1) 馬籠に向けて中山道の雄大な景色



(写真2) 馬籠宿の美しい街並み



(写真3) 一石栃立場の美しい桜



(写真4) 休憩中にフランス人と談笑



